

# 「興福寺建築諸図」に描かれる五重塔

目黒新悟

## I 序

### 1 背景と目的

東京国立博物館が所蔵する「興福寺建築諸図」(列品番号:P-2437)は、興福寺堂塔の建築図面類を中心に構成される資料群である。この資料は濱島正士によって紹介され、資料の点数、形態、内容、性格など、その概要が知られている(濱島1989・1992)。この資料は、享保2年(1717)正月4日に興福寺で起きた火災前後に描かれた堂塔の実測図ないし修理・再建計画図の性格を有すると考えられており、往時の造営計画や伽藍復興の思想を窺い知ることができる。

「興福寺建築諸図」には、享保2年以前の建立であり、現存する東金堂と五重塔についても描かれる。特に五重塔については、立断面図「興福寺五重塔式拾歩一地割」(列品番号:P-2437-22、以下「資料③」と仮称)のほか、この下図と考えられる略断面図「地割ノ下割也」(列品番号:P-2437-20、以下「資料②」と仮称)と、相輪の略立面図「興福寺五重塔也」(列品番号:P-2437-21、以下「資料①」と仮称)の3点がある。資料③に描かれる五重塔は、組物など現状と異なる形式が散見することが知られている。しかし、これら資料の文字・描画の詳細な内容や、資料相互、現状との関係などは不明な点が多い。

本稿は、「興福寺建築諸図」の検討をおこなう端緒として、現状との比較が可能な点、各種の資料が伝来する点などから、現存する五重塔を対象とする。「興福寺建築諸図」のうち五重塔を描いた資料3点について(表1)、文字を含め検討し、描き起こし図を作成してこれらを資料紹介する。その上で、資料相互、現状との比較を通して、資料の内容と特徴を明らかにすることを目的とする。

### 2 方 法

東京国立博物館にて「興福寺建築諸図」などの調査をおこない、観察、写真撮影等の記

表1 各資料の概要

仮称	主な種別	年紀	記名	外形寸法	縮尺	列品番号
資料①	相輪の略立面図	元禄4年(1691)		0.49×0.32m		P-2437-21
資料②	略断面図	享保2年(1717)		0.55×0.30m		P-2437-20
資料③	立断面図	享保2年(1717)	中西庄兵衛武綱	3.00×1.17m	1:20	P-2437-22

録をおこなった<sup>1</sup>。その後、五重塔を描いたとされる資料3点について、文字の釈読・翻刻をおこなうとともに<sup>2</sup>、調査にもとづき描き起こし図を作成した<sup>3</sup>。文字および描画の内容の検討や、資料相互、現状との比較から共通点・類似点と相違点の抽出をおこない、資料の内容と特徴を考察した。

### 3 位置付け

先述のように、濱島正士は「興福寺建築諸図」を紹介した。ここに描かれる建物の特徴として、中金堂・東金堂・五重塔・南大門・鐘楼・鼓楼では、尾垂木の設置位置の上昇にともない、組物の積み上げが高くなっていることを指摘した。奈良文化財研究所による興福寺境内の発掘調査の報告では、「興福寺建築諸図」を用いて発掘遺構との比較・検討がおこなわれた<sup>4</sup>。『重要文化財興福寺南円堂修理工事報告書』は、「興福寺建築諸図」と思われる東京国立博物館所蔵資料を紹介し、ここに描かれる南円堂が享保2年（1717）正月4日の火災以前の前身建物の実測図であると指摘する。清水重敦は、「興福寺建築諸図」と関連のある木興家所蔵資料を紹介した（清水2000・2002など）。薮中五百樹は、近世における堂塔の修理歴を概説した（薮中2005）。海野聰は、「興福寺建築諸図」に描かれる食堂・竈殿が鎌倉時代の形式を大きくえていないと判断した上で、建築形式を分析した（海野2020）。「興福寺建築諸図」は概要が紹介されているが、本稿は文字の翻刻やそれにもとづく検討をおこなう点で異なる。さらに、従来より詳細に資料の文字・描画の内容を検討し、資料相互、現状との比較を通して新たな知見を得る点に意義がある。

## II 興福寺五重塔の概説

天平2年（730）に創建された五重塔は、『興福寺流記』によれば高さが15丈1尺（約44.7m）で、うち「伏盤」（露盤<sup>5</sup>）以上が5丈1尺（約15.1m）、五重以下が10丈（約29.6m）とされる。この史料にみえる基本寸法や比例は、現存する奈良時代の層塔や現在の興福寺五重塔に近似するから、信頼をおくると考えられている（浜島1984）。

現在の興福寺五重塔は応永33年（1426）の建立で、主要堂宇が焼失した享保2年（1717）の火災で一旦焼き付いたものの<sup>6</sup>、焼失を免れている。五重塔はそれ以前に焼失と再建を繰り返し、現在の五重塔は6度目の建立になるもので、全重方3間の本瓦葺である。塔身高（礎石天端～露盤下端）117.7尺（35.7m）、相輪高（露盤下端～宝珠天端）50.0尺（15.2m）で、全高（礎石天端～宝珠天端）167.7尺（50.8m）である（浜島1984）。

現在の五重塔は創建の五重塔と比して高さが増しているが、これは野小屋や桔木など奈良時代と異なる構法によるためと考えられる。現在の五重塔の初重は中央間10.34尺、両

脇間9.43尺の総間29.2尺である。この初重総間は天平尺で30.0尺に相当するから、初重の平面規模は創建の五重塔から大きな変化はないと考えられている（浜島1984）<sup>7</sup>。それ以外の寸法については、『日本建築史基礎資料集成11 塔婆1』などを参照し、必要に応じて図上計測した。基壇高は5.2尺あまり、基壇の出（初重側柱筋～基壇の縁）は14.49尺で、初重の軒の出（側柱筋～茅負下角）は17.3尺ほどである。五重総間は20.16尺で、通減率（初重総間にに対する五重総間）は69%である。なお、現在の五重塔の修理履歴は不明な点が多いが、直近では明治32年（1899）の屋根葺替工事が知られ（工藤1969）、資料①～③の作成時と現状とで一部の形式が異なることが想定される。

### III 各資料に描かれる五重塔

**資料① 相輪の略立面図** 資料は薄手の和紙に描かれた図面で、資料の外形は0.49×0.32mほどである（図1）。この資料には相輪の略立面図が描かれる。さらに、相輪を正位としたときの本紙の左端には右を天、左を地とした三手先組物の断面図が描かれる。この資料に記載される文字を翻刻し、描画とあわせ書き起こし図を作成した（図2）。本紙の右下に「興福寺五重塔也」の題と「元禄四辛未卯月廿一日ニ改也」の年紀がある。相輪の略立面図は、「相輪を修理するために実測したもの」と考えられている（濱島1992）。

記載される文字からは、元禄4年（1691）卯月21日の興福寺五重塔に関する図面であることがわかる。ここに「改」とあるから、この日に検査（実測）した図と考えられる。資料の作成は、実測の直後と思われる。「此図四部一尺」とあるが縮尺は25分の1にはならず、およそ48分の1を測る。資料にみえる年紀は、享保2年（1717）正月4日の火災以前のものである。隣接する東金堂は、同じく元禄4年卯月に背面扉の修理がおこなわれたから<sup>8</sup>、五重塔についても同時期に検査（実測）され作成された資料と考えて良いだろう。記載される文字は、筆跡から全て同一人物によるもので、加筆・修正のない一時期のものと思われる。ただし描画については、後述するように三手先組物の断面図は異なる時期に描かれた可能性がある。

記載される寸法を確認する。まず、「惣高合拾七丈五尺七寸也、此内下ノ石たん高サ五尺也」とあるから、基壇（「石たん」）を含む地盤面～宝珠天端の総高が175.7尺である。基壇高は5.0尺であるから、全高は170.7尺である。次に、「龍鳳両珠ノ頂上より露盤上場迄高四丈八尺五寸、又露盤高二尺、まへたれ高二尺、メ四尺」とあるから相輪高は50.5尺で、これと「まへたれ」（露盤下の熨斗積）の高さの和は52.5尺である。全高と相輪高の差から、塔身高は120.2尺となる。相輪より下の高さは「一、五重めノ軒より地形迄十丈一尺三寸」、「五重め軒よりはん下迄ノ高二丈一尺九寸」とあるから、地盤面（「地形」）～五重軒先が

101.3尺、五重軒先～「ろはん下」が21.9尺であり、地盤面～「ろはん下」が123.2尺とわかる。ここで、「ろはん下」の位置を「まへたれ」下端とみると、先述した総高と整合する。

左端に描かれる三手先組物の断面図は、どの建物の図か判然としない。ここでも、尾垂木は軒支輪桁の上に載る。挺出する二の肘木は内部に引き込まれて側まわりの虹梁となり、その中央に板幕股を載せて天井桁を受ける。中世の層塔であれば、幕股を置かずに三の肘木を繋肘木とする形式が通例である。また、後述する資料③に描かれる形式とも異なる。これらの点から、この三手先組物の断面図は、五重塔とは異なる建物について描かれたものと思われる。五重塔と異なる建物についての描画であるから、異なる時期に描かれた可能性がある。なお、この幕股は東大寺軒轅門の幕股に形状が類似する。

**資料② 略断面図** 資料は薄手の和紙に描かれた図面で、資料の外形は0.55×0.30mほどである（図3）。この資料には五重塔の略断面図が描かれる。さらに、略断面図を正位としたときの本紙の右端には左を天、右を地とした組物の立面図が描かれる。この資料に記載される文字を翻刻し、描画とあわせ書き起こし図を作成した（図4）。本紙の右上に「地割ノ下割也 ／ 興福寺五重塔」の題と「享保二年 ／ 十二月廿三日」の年紀がある。略断面図は後述する資料③の下図で、「各重の高さなどの実測の寸法を書き込んだもの」と考えられている（濱島1992）。

記載される文字からは、享保2年（1717）12月23日の興福寺五重塔に関する図面であることがわかる。「地割ノ下割」とあるから、立断面の割り付けの下図と考えられる。資料にみえる年紀は、同年正月4日の火災後のものである。記載される文字は、筆跡から全て同一人物によるもので、訂正箇所は散見するもののいずれも一連の訂正と思われ、後世による追筆などのない一時期のものと考える。ただし描画については、組物の立面図は文字との重複関係から、文字が記載される以前のものである。

記載される寸法を確認する。まず相輪高については、宝珠天端と露盤下端の○印付きの引出線によって範囲が明示され、「四丈八尺五寸」と記される。そのうち、露盤高は「二尺」であることが図中の文字より判明する。次に、その下の五重屋根に目を向けると、露盤下端と五重軒先の△印付きの引出線によって範囲が明示され、「二丈壹尺九寸」と記される。これは、資料①の「五重め軒よりろはん下迄高二丈一尺九寸」の21.9尺に対応する。

続いてその下の塔身について確認すると、縦方向に寸法が列記される。これらの寸法は各重に対応すると思われる。部材が描かれる左側部分について、五重から順にみていく。五重には、大斗尻（台輪上）と丸桁天端の○印付きの引出線によって範囲が明示され、「八尺八寸」とある。これは、大斗尻（台輪上）～丸桁天端の組物積上高を示している。その脇には、四重の丸桁天端と五重の大斗尻（台輪上）の○印付きの引出線によって範囲が明示され、「一丈四尺七寸」とある。四重以下も、およそこれらと同様の範囲について記さ

れていると思われる。例えば四重の大斗尻（台輪上）～丸桁天端は「八尺八寸（抹消）／八寸八分」、三重の丸桁天端～四重の大斗尻（台輪上）は「一丈□□」とある。各重の丸桁まわりに記載が集中する。ただし、引出線の位置には揺れがあり、記載寸法にも訂正箇所が散見する。記載も煩雑で乱れが多く、釈読が困難な部分も存在する。初重については大斗が上下二段に描かれ、寸法の範囲は重複して表現される。基壇上面～上段の大斗尻は「一丈四尺六寸」で、描画内容から初重の柱高さと台輪成の和を<sup>9</sup>、下段の大斗尻～丸桁天端は「一丈六寸」で、描画内容から大斗尻～丸桁天端の組物積上高をそれぞれ示していると思われる。初重の柱の下には「五尺」とあり、これは基壇高を示していると思われる。

かわって、塔身の右に縦2列に並ぶ寸法について確認する。二重～五重の各重に対応する位置に2種類の寸法が記載され、右の寸法には囲み線が引かれる。これも五重から順にみていく。五重には、右に○囲みで「一丈九尺九寸」とあり、その左に「一丈六尺一寸七分八厘」とある。これらの差は3.722尺である。本紙の右下には「壹丈四尺九寸なり／三尺七寸二分二厘ツ、引」とある。2列に並ぶ2つの寸法の差は、この「三尺七寸二分二厘」と対応し、四重以下の2つの寸法の差も同寸の3.722尺である。なお、14.9尺を二重以上の4層で除すると3.725尺となり、3.722尺に近似した値である。

二重～五重の右側の列の○囲み寸法の和は、91尺となる。この列のさらに右側には、「四間メ九丈一尺」とあり、この記載と対応する。ここから、これらの寸法が二重～五重の各重に対応すると考えられる。ただし、寸法の範囲は先述の通り訂正箇所が散見すること、記載が煩雑で乱れが多いことなどから、この資料の観察のみでは判然としない。「四間メ九丈一尺」の右下には、「上下十丈二尺六寸」とある。これについても、寸法の範囲は不詳である。これらの寸法の範囲は、後述する資料相互および現状との比較から検討する。

**資料③ 立断面図** 資料は厚手の和紙に描かれた図面で、資料の外形は3.00×1.17mほどである（図5）。この資料には左半を断面図、右半を立面図とした立断面図が全体に大きく描かれ、左上に九輪の最下の輪（第一盤）の伏図が、左下に略平面図が小さく描かれる。この資料に記載される文字を翻刻し、描画とあわせ書き起こし図を作成した（図6～8）。本紙の右下に「興福寺五重塔式拾歩一地割／但五分以壹尺也／西表之図也」の題と「享保貳丁酉年十二月廿三日仕候」の年紀があり、さらに「中西庄兵衛武綱」<sup>10</sup>の記名がある。この資料は、「実測に基づいて作られたものの、厳密な実測図ではなく、組物を一部変更する修理計画図」と考えられている（濱島1992）。

記載される文字からは、享保2年（1717）12月23日の興福寺五重塔に関する20分の1の図面であることがわかる。資料にみえる年紀は、同年正月4日の火災後のものである。ここにみえる記名は、国宝興福寺三重塔の享保6年（1721）の修理棟札の工匠名にもみえるから<sup>11</sup>、この資料は享保2年の作成とみて良いだろう。記載される文字は、筆跡から全て

同一人物によるもので、加筆・修正のない一時期のものと考えて良い。

この資料に描かれる建物は、基壇上に建つ全重方3間の五重塔で、三手先組物、二軒繁垂木である。初重屋根の「造瓦地」の記載や鬼瓦と稚児棟の描画から、本瓦葺であることがわかる。この三手先組物は、従来の指摘通り尾垂木の設置位置が通例より高く、これにともない組物積上高も高い。現存する文化財建造物にはない特異な組物形式である。立面図では屋根を軒先まで表現せず、組物を丸桁まで表現する。この形式は、従来指摘がなかったが、軒支輪桁の天端と尾垂木上の巻斗の下端が揃うように計画された可能性がある。これにより、丸桁の位置を組物の積み上げから決定することが可能となっており、一の肘木から丸桁まで、尾垂木を介すものの肘木・巻斗が整然と積み上がる構成となっている。

ただし、立面図と断面図とで、組物の描画に矛盾が生じている。例えば、断面図では軒支輪桁を受ける二手目と実肘木を受ける三手目の2箇所にのみ秤肘木が置かれる描画となっている。しかし、立面図では二の肘木と四の肘木の位置にも秤肘木が描かれ、さらに尾垂木は描かれない。このほか、立面図では上下に並ぶ秤肘木と三斗とで、前後関係が整合しない。三斗のうち中央の巻斗はその上に載る秤肘木と筋が揃うが、両脇の巻斗はその上に載る秤肘木と筋が揃わない描画となっている。

この図面には、各部位・部材などの寸法が書き込まれている。初重の各柱間寸法は、中央間10.35尺、両脇間9.35尺の総間29.05尺であり、枝数は中央間12枝、両脇間11枝である。ここから、1枝寸法は0.85尺ほどを測る。高さ方向については「惣高合宝珠頂上分地形迄拾七丈八尺七寸有」とあり、地盤面（「地形」）～宝珠天端の総高が178.7尺であることがわかる。このうち、「壇上高サ五尺」とあり基壇高が5.0尺であるから、全高はこの差から173.7尺となる。このほか、各重の柱高さなどが記載される。初重は「柱長サ石分大斗本尻迄壹丈四尺六寸」とあり、礎石天端～大斗尻（柱高さと台輪成の和）が14.6尺である。二重の柱高さと台輪成の和は「大王柱長サ七尺壹寸」とあり、7.1尺である。二重には台輪成の記載があり、隅で「厚壹尺壹寸」、平の中央で「大王厚九寸」とあるから、隅で1.1尺、平の中央で0.9尺である。三重以上は柱高さについてのみ記載があり、三重は6.45尺、四重は6.64尺、五重は6.45尺である。仮に、これらに二重の台輪成0.9尺を足せば、三重から順に7.35尺、7.54尺、7.35尺となり、いずれも二重より大きい。

ただし、これらの記載される寸法は、立断面図の高さ方向の描画とは異なる。立断面図の縮尺は20分の1であるからこれを図上計測すると、全高が約187尺となり記載される寸法よりも大きい。各重の柱高さと台輪成の和についても、初重が約14.2尺、二重が約9.9尺、三重が約8.7尺、四重が約7.2尺、五重が約6.6尺を測り、上の層にいくに従い遞減する描画である。なお、初重の各柱間寸法の図上計測値は、記載される寸法と対応する。五重総間は図上計測で20.7尺ほどを測り、递減率は71%となる。

## IV 資料相互および現状との比較

### 1 資料相互の比較

資料相互を比較すると、各資料には寸法値の共通点が散見する（表2）。資料①～③では基壇高が「五尺」で共通し、特に五重屋根・相輪部分に記される五重軒先～露盤ないし「まへたれ」下端がいずれも21.9尺で寸単位まで整合する。ただし、相輪付近の範囲に揺れがある。資料②・③では、実測が困難な五重軒先～露盤下端の寸法について、資料①を参照した可能性がある。

資料①に記載される塔身高は、資料③の図上計測値と異なる。相輪高は、資料①と資料②とで範囲に揺れがあるが同じ寸法が記載される<sup>12</sup>。相輪の各部材寸法も類似するものの若干異なる。相輪の各部材寸法は、資料③のほうが資料①より詳細に記される。相輪の各部材寸法は、各資料の作成ごとの実測値ないし資料③は修理後の設計寸法と思われる。

塔身部分に関して、資料②の観察のみでは範囲が不明瞭であった寸法について、資料③との比較から検討する。資料②・③は記載される寸法から、五重軒先～露盤下端（21.9尺）、初重の柱高さと台輪成の和（14.6尺）が共通する。それ以外は、記載される寸法の範囲が異なる、あるいは判然としないなどで比較できない。そのため、資料③の立断面図の高さ方向の描画と記載される寸法とが対応しない点に留意しつつ、資料②で範囲が明示される寸法を、資料③の図上計測値と比較する。すると、資料②に記載される各重の組物積上高は、資料③の図上計測値と類似する。また、四重の丸桁天端～五重の大斗尻（台輪上）も資料②（14.7尺）と資料③の図上計測値（14.6尺）とで類似する。ここから、資料②に記載される塔身の初重大斗から上の寸法は、資料③の描画と対応することがわかる<sup>13</sup>。

ここで、資料②の○囲み寸法に着目すると、資料③の図上計測での各重の丸桁間の高さに類似する<sup>14</sup>。また、資料②の「四間メ九丈一尺」は、資料③の図上計測での初重～五重の丸桁間の高さに類似する。資料②の各重の丸桁まわりに記載が集中する点なども鑑みれば、往時の造営では各重の高さを丸桁間で計画していた可能性を指摘できる。

資料②・③にみられるこれらの共通点・類似点や月日まで同じ年紀から、資料②は資料③と同時期の作成とみて良いだろう。資料②は資料③を作成するために同時期に作成された、各重の高さなどを検討するための立断面の割り付けの下図であると考えられ、「地割ノ下割」という標題の内容を確認できる。なお、資料②の初重の丸桁天端～下段の大斗尻の「一丈六寸」であるが、資料③で初重の丸桁天端～大斗尻を図上計測すると11.6尺となり、1.0尺の誤差が生じる。資料②にみえる初重丸桁～五重丸桁の高さ（91尺）と右下の「上下十丈二尺六寸」の差が11.6尺であることも鑑みれば、この「一丈六寸」は「一丈一尺六寸」の誤記で、「上下十丈二尺六寸」の範囲は礎石天端～五重丸桁の可能性がある。

表2 資料相互および現状との比較

	資料① 記載寸法	資料② 記載寸法	資料③ 記載寸法 図上計測	現状 公称寸法 図上計測
基壇高	5.0	5.0	5.0 5.0	5.2
塔身高	120.2*		134.1	117.7
相輪高	50.5*	48.5	52.9	50.0
全高(塔身+相輪)	170.7*		173.7* 187.0	167.7
各重の 柱高さと 台輪成の和	五重		(7.35) 6.6	6.7
	四重		(7.54) 7.2	6.7
	三重		(7.35) 8.7	7.5
	二重		7.1 9.9	7.5
	初重	14.6	14.6 14.2	14.4
	計		8.8 8.88 9.7 9.7 10.6 47.68	7.6 7.7 8.4 8.0 8.4 40.1
各重の 組物 積上高	五重	16.178 18.078 20.078 21.778 計	19.9 21.3 23.4 24.9 89.5	18.4 18.8 20.0 19.8 77.0
	四重	19.9 <sup>○</sup> 21.8 <sup>○</sup>		
	三重	23.8 <sup>○</sup>		
	二重	25.5 <sup>○</sup>		
	初重			
	計	91.0 <sup>○</sup>		
五重軒先～露盤下端	23.9*	21.9	21.9 22.3	21.4
五重屋根勾配	0.87		0.86 0.86	0.78
相輪の 各高さ と平面	宝珠	2.0	2.1(竜舎)	2.015
	水煙	6.7	7.05	8.13
	第九盤	0.6 (5.9)	0.8 (6.0)	0.73 (4.96)
	第一盤	0.8 (6.5)	0.8 (6.6)	0.975 (6.035)
	受花	3.0 (6.6)	2.9	2.382 (6.88)
	伏鉢	3.0 (5.3)	2.8 (5.4)	2.81 (4.08)
	露盤	2.0 (8.0)	2.0	1.87 (7.86)
	中央間		10.35 9.35	10.34 9.43
初重 平面	両脇間		29.05*	29.1
	総間			29.2
	軒の出		18.8	17.3
	基壇		51.8 45.0	58.18
五重総間			20.7	20.16
透減率			71%	69%

表2注 単位は尺(1尺=0.303m)である。\*付きの寸法は、記載される寸法から算出した寸法である。「資料②」・「各重の丸桁間の高さ」欄の○付きの寸法は、○囲み寸法であり、もう一方は○囲みのない寸法である。「資料③」・「各重の柱高さと台輪成の和」欄の( )内の寸法は、各重の柱高さと二重の台輪成の和である。「相輪の各高さと平面」欄の( )内の寸法は当該部材の平面寸法であり、もう一方は高さ寸法である。なお「資料③」欄では、相輪の各部材は小規模なため、図上計測をおこなわなかった。

## 2 「興福寺建築諸図」と現状との比較

**資料① 相輪の略立面図** 先述の通り、資料①から判明する寸法は、基壇高5.0尺、塔身高120.2尺、相輪高50.5尺である。まず基壇高は、現状では5.2尺あまりであり、資料①はこれと大差ない。次に塔身高は、現状では117.7尺であり、資料①はこれより2.5尺高い。続いて相輪高は、現状では50.0尺であり、資料①は50.5尺でこれと大差ない。相輪の各部材寸法も同様に概ね大差ないが、水煙の高さと九輪の径はやや異なる。資料①では水煙について「高六尺七寸」、第一盤（最下の輪）の径は「六尺五寸」、第九盤（最上の輪）の径は「五尺九寸」と記載されるが、現状では水煙の高さは8.13尺、第一盤の径は6.035尺、第九盤の径は4.96尺である。五重屋根勾配もやや異なり、資料①では「八寸七分高倍」と記載され、図もこれに対応するが、現状（図上計測）の引渡勾配はおよそ7.8寸である。これと関連して、五重軒先～露盤下端は資料①では23.9尺とされるが、現状（図上計測）では21.4尺を測る。

資料①に記載される各種の寸法は概ね現状に類似した値であり、従来の指摘通り実測図と認めて良いだろう。異なる寸法は、元禄4年（1691）の状況を伝えるものと思われる。

**資料② 略断面図** 先述の通り、この資料からは大きな寸法として各重の丸桁間の高さや組物積上高などが分かった。資料②に記載される○囲みの寸法は各重の丸桁間の高さと考えられるが、これはいずれも現状より大きく、初重～五重の丸桁間の現状との差は14.0尺である。資料②に記載される各重の組物積上高もいずれも現状より大きく、合計値の現状との差は7.58尺である。これらの高さの差は、資料③にみえるように尾垂木の設置位置の上昇にともない組物積上高が高くなつたことなどによる変化と考えられる。よって、塔身部分については従来指摘されてきた実測図のみの性格は認めることができない。なお、資料②の右下の「壱丈四尺九寸なり」は、初重～五重の丸桁間の現状との差に類似する。14.9尺の4分の1に近い値が減じられた○囲み寸法の左の寸法は、現状の丸桁間の高さに類似し、これに対応することがわかる。ここから資料②は、現在の五重塔の実測値と異なることが認識された上で作成されており、建物の一部に改変を加える意図が窺える。

**資料③ 立断面図** この資料に描かれる建物は、全重方3間、五重塔、本瓦葺、三手先組物、二軒繁垂木であり、これら主要な形式は現状と共通する。記載される初重の各柱間寸法は現状に類似し、さらに初重の枝数は現状と同一である。ただし、地盤面～宝珠天端の総高178.7尺は、現状より5.8尺大きい。記載される各重の柱高さも現状と異なる。描画の図上計測値も、ほとんどが現状より大きい。細部の形式は、資料③と現状とで大きく異なる。資料③にみられる主要な相違点は以下の通りである。

- ・基壇：平面規模が小さく、基壇縁から軒先までの水平距離が大きい点。
- ・組上構造：積重構法であるものの、尾垂木・地垂木が同寸勾配で各垂木尻が接しない

で積み重なる点、四天束が四天柱筋に揃う点、四天束の東踏が井桁に組まれる点。

- ・軸部：初重では四天柱を側柱より高くせずほぼ同高で、四天柱間にも台輪が置かれる点、両脇間に腰束が無く腰貫が入る点、側1間に二重虹梁が架かる点、二重以上では腰長押が巡る点、四天柱径が肘木断面に近似し細い点、四天柱に腰貫が通らない点。
- ・組物：尾垂木の設置位置が高い点、建物内側の一手目に巻斗が並ぶ点、繫肘木はその上の巻斗敷面（繫肘木底面）まで造り出す大断面でない点、初重の四天柱上に組物が置かれる点、二重以上の繫肘木間には四天柱筋に飼物が入る点。
- ・軒：軒の出が大きい点、地垂木が急勾配な点。

これらの相違点から、この資料は現在の五重塔の実測図として認めることはできない。従来指摘されてきたように「組物を一部変更する修理計画図」などが考えられるが（濱島 1992）<sup>15</sup>、この資料に描かれる建物は、現在の五重塔の組物だけの改造に留まらず、組上構造・軸部なども大きく異なることから、再建に近い修理でなければ実現せず、また組物の納まりの矛盾点も解決せねば実現しない。なお、相輪の各部材寸法は概ね現状と類似するが、水煙と受花の高さ寸法には開きがある。この資料に描かれる建物の主要な形式は現状と共通し、さらに初重の各柱間寸法や五重総間、通減率も類似するから、この資料に描かれる建物の計画案では、これらについて踏襲したと考えられる。

## V 結

本稿では「興福寺建築諸図」のうち五重塔を描いた資料3点について、文字を含め検討し、描き起こし図を作成してこれらを資料紹介した。その上で、資料相互、現状との比較を通して資料の内容と特徴を考察し、先行研究の追認を含め以下の知見を得た。

**資料①** 元禄4年（1691）に実測された興福寺五重塔の相輪・五重屋根の略立面図であること。記載される寸法は資料②・③と一部共通し、概ね現状にも類似すること。

**資料②** 享保2年（1717）の火災後に作成された興福寺五重塔の略断面図で、資料③を作成するための下図と考えられること。記載される寸法は、相輪部分が資料①および現状と、塔身の初重大斗から上の寸法が資料③の図上計測値と類似すること。初重の柱高さと台輪成の和および五重軒先～露盤下端は、資料③に記載される寸法と対応すること。資料①ないし実測にもとづいて相輪部分の寸法が把握された上で、塔身部分の計画が練られ作成されたと考えられること。塔身部分については、従来指摘されてきた実測図のみの性格は認めることができないこと。塔身部分の高さ方向の設計では、各重の丸桁間で計画がなされた可能性があること。現在の五重塔の実測値と異なることが認識された上で作成されており、建物の一部に改変を加える意図が窺えること。

**資料③** 享保2年の火災後に作成された興福寺五重塔の20分の1の立断面図および略平面図であること。従来指摘されてきたように修理計画図の可能性があるが、ここに描かれる建物を実現するには組物を一部変更するだけの改造に留まらないこと。記載される寸法と立断面図の高さ方向の描画は対応せず、ほとんどで描画の方が大きいこと。相輪部分に記載される寸法は概ね資料①および現状と類似すること。記載される五重軒先～露盤下端、初重の柱高さと台輪成の和は資料②と共にするものの、塔身の初重大斗から上では描画の図上計測値が資料②と類似すること。

本稿での知見から鑑みるに、これらの資料は往時の建築生産や興福寺の伽藍復興を検討する上で貴重である。享保2年の火災後に、被災を免れた建物を含め伽藍全体の更新の計画があった可能性があり、本稿での知見は「興福寺建築諸図」全体の性格を考える上でも重要である。今後は、現在進行中の興福寺五重塔の修理工事を踏まえた資料の再検討と、このほかの「興福寺建築諸図」の検討や類例との比較が課題である<sup>16</sup>。

## 註

- 1 調査は、2020年7月30日に東京国立博物館にて、奈良文化財研究所都城発掘調査部長兼同部平城地区遺構研究室長 箱崎和久氏、同室アソシエイトフェロー 山本光良氏と共に、奈良文化財研究所が東大寺から受託した「東大寺東塔復元案作成にかかる調査研究業務」での調査と併せて実施したもので、本稿の執筆にあたり調査内容を別途検討し、論文としてまとめた。調査にあたっては、以下の各氏から格別の高配を賜った。元奈良国立文化財研究所長 鈴木嘉吉氏、当時独立行政法人国立文化財機構理事長兼奈良文化財研究所長 松村恵司氏、当時東京国立博物館副館長 井上洋一氏、同館学芸研究部百五十年史編纂室長兼同部調査研究課書跡・歴史室長 恵美千鶴子氏、同部列品管理課貸与特別観覧室 松本玲子氏。
- 2 文字の釈読・翻刻では、奈良文化財研究所都城発掘調査部主任研究員 桑田訓也氏、同所文化遺産部歴史研究室有期雇用職員 栗原正東氏の協力を得た。
- 3 描き起こし図の作成では、奈良文化財研究所都城発掘調査部平城地区遺構研究室有期雇用職員 鎌田礼子氏、同室派遣雇用職員 西村真紀子氏の協力を得た。
- 4 『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』など。
- 5 浜島1984では伏鉢と解しているが、相輪の各部材名称に関する複数の先行研究をレビューし、再検討した大西1976によれば、露盤と解すのが妥当である。
- 6 「興福寺伽藍炎焼之記」(『重要文化財興福寺南円堂修理工事報告書』所収)。
- 7 なお、隣接する東金堂は発掘調査で、ほとんどの礎石が創建以来のもので、基壇高も創建以来変化ないことが分かった(『国宝興福寺東金堂修理工事報告書』)。
- 8 東金堂の背面扉の墨書に「扉修覆元禄四辛未卯月上旬」とあり、この扉は同年同月に取り替えられたことが知られる(『国宝興福寺東金堂修理工事報告書』)。
- 9 ただし、初重に台輪は描かれておらず、描画を省略したものと思われる。
- 10 濱島1989では、「中西庄兵衛武綱」とも「中西庄兵衛氏総」とも翻刻される。
- 11 なお、ここに諱は記載されない。
- 12 資料②では相輪高が「四丈八尺五寸」で、うち露盤高が「二尺」であるが、資料①では露盤

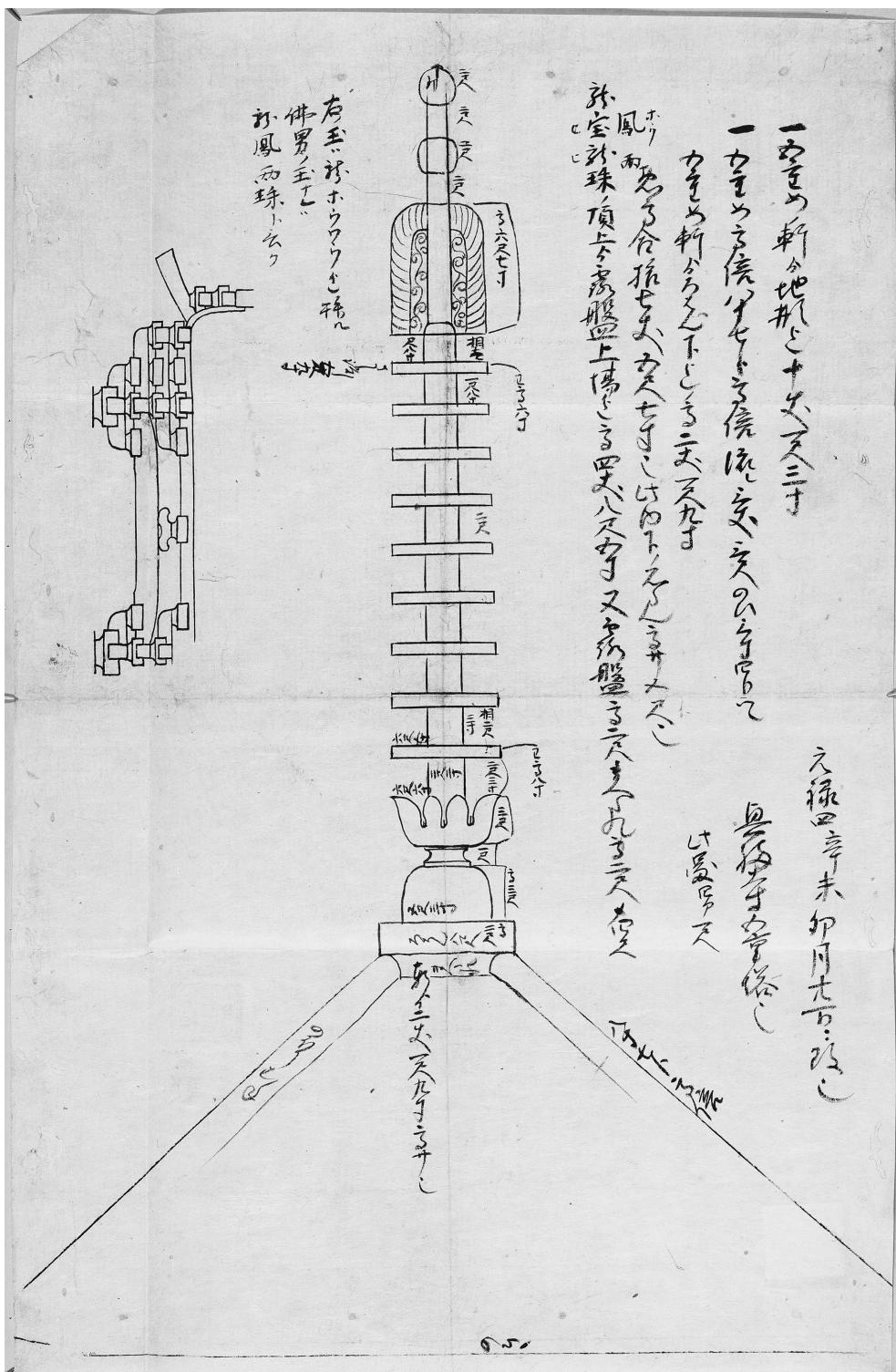


図1 資料① 相輪の略立面図（東京国立博物館所蔵 P-2437-21、東京国立博物館提供）

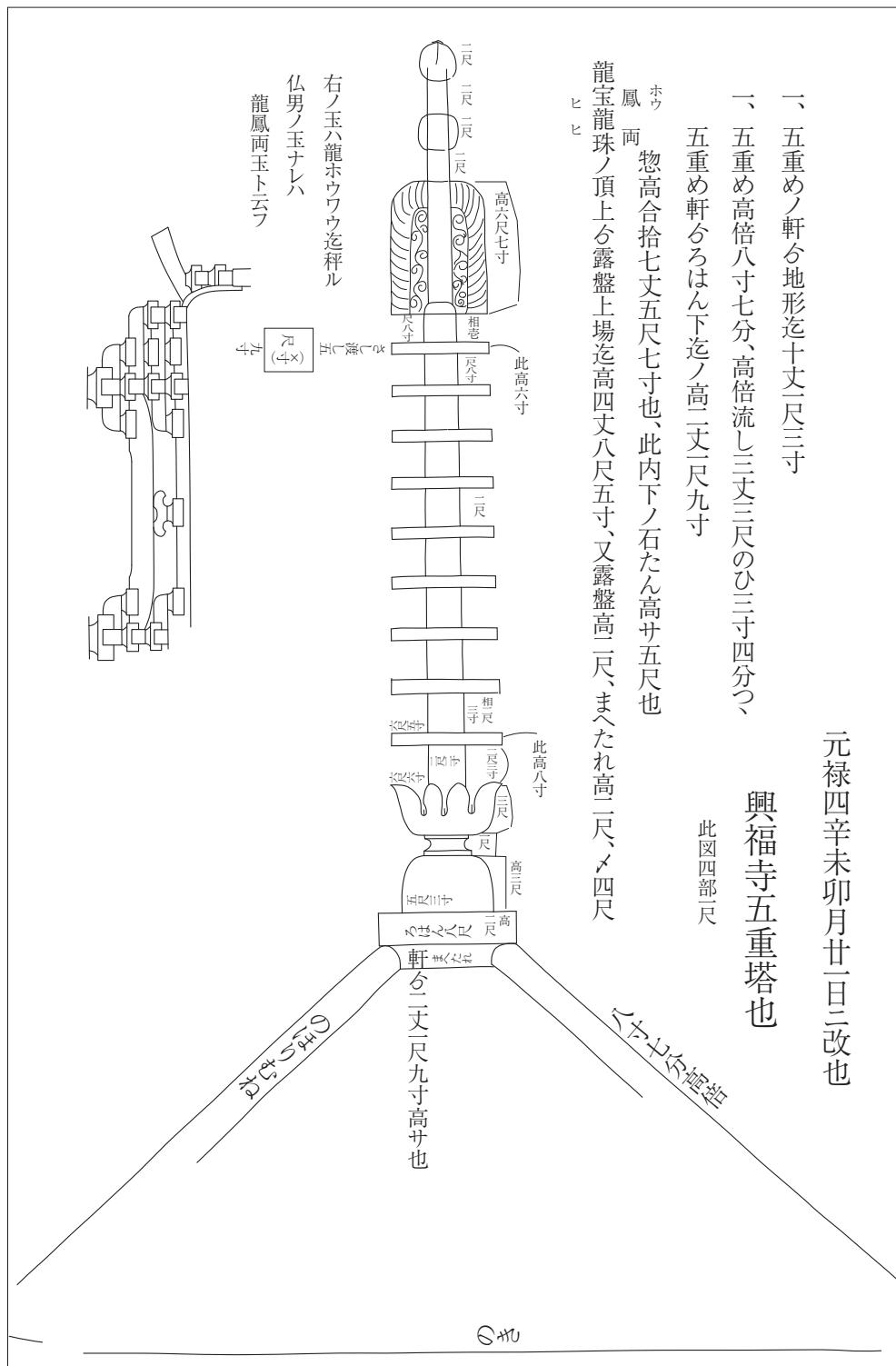


図2 資料① 相輪の略立面図（東京国立博物館所蔵 P-2437-21）書き起こし図（筆者作成）

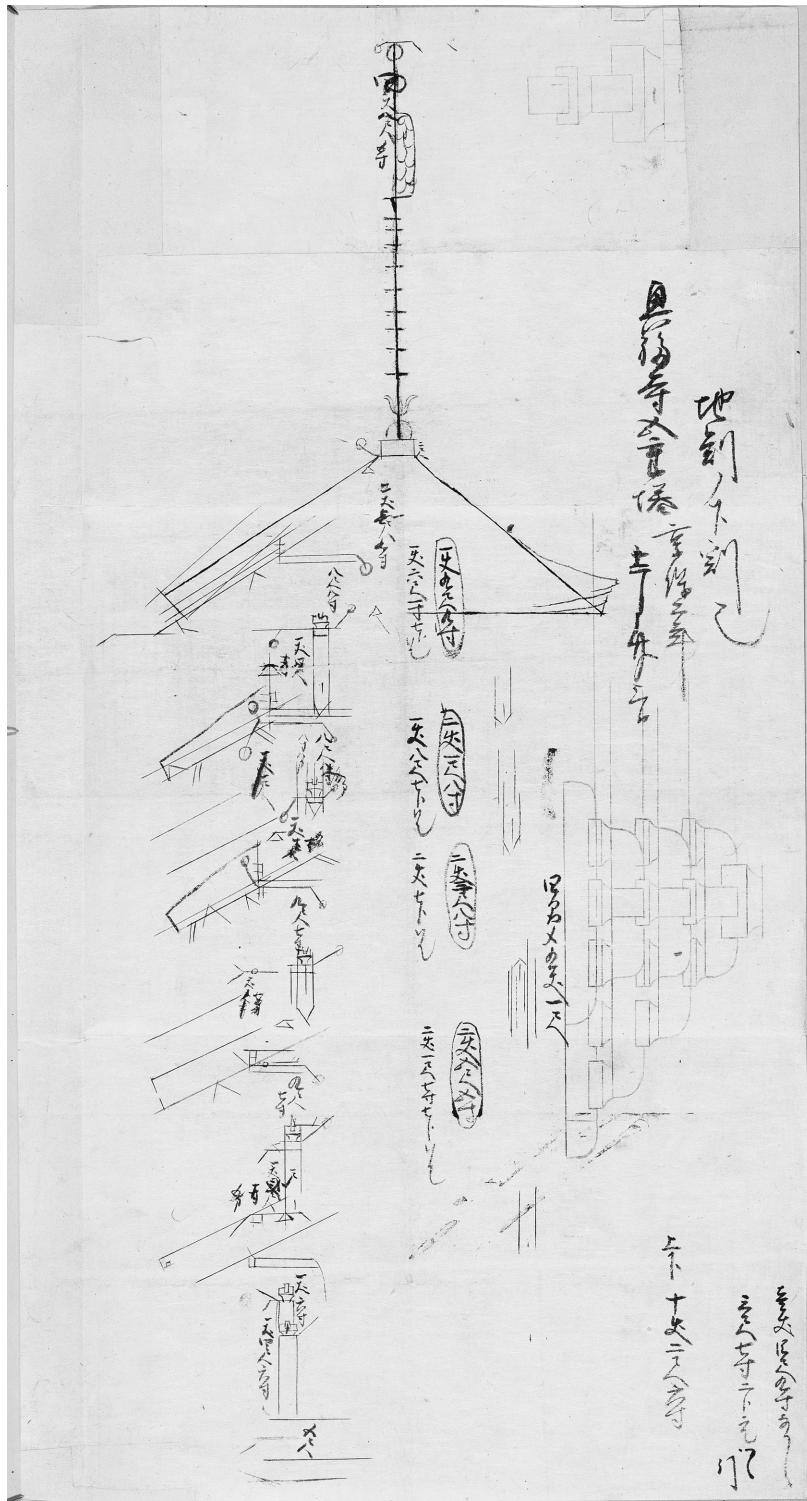


図3 資料② 略断面図（東京国立博物館所蔵 P-2437-20、東京国立博物館提供）

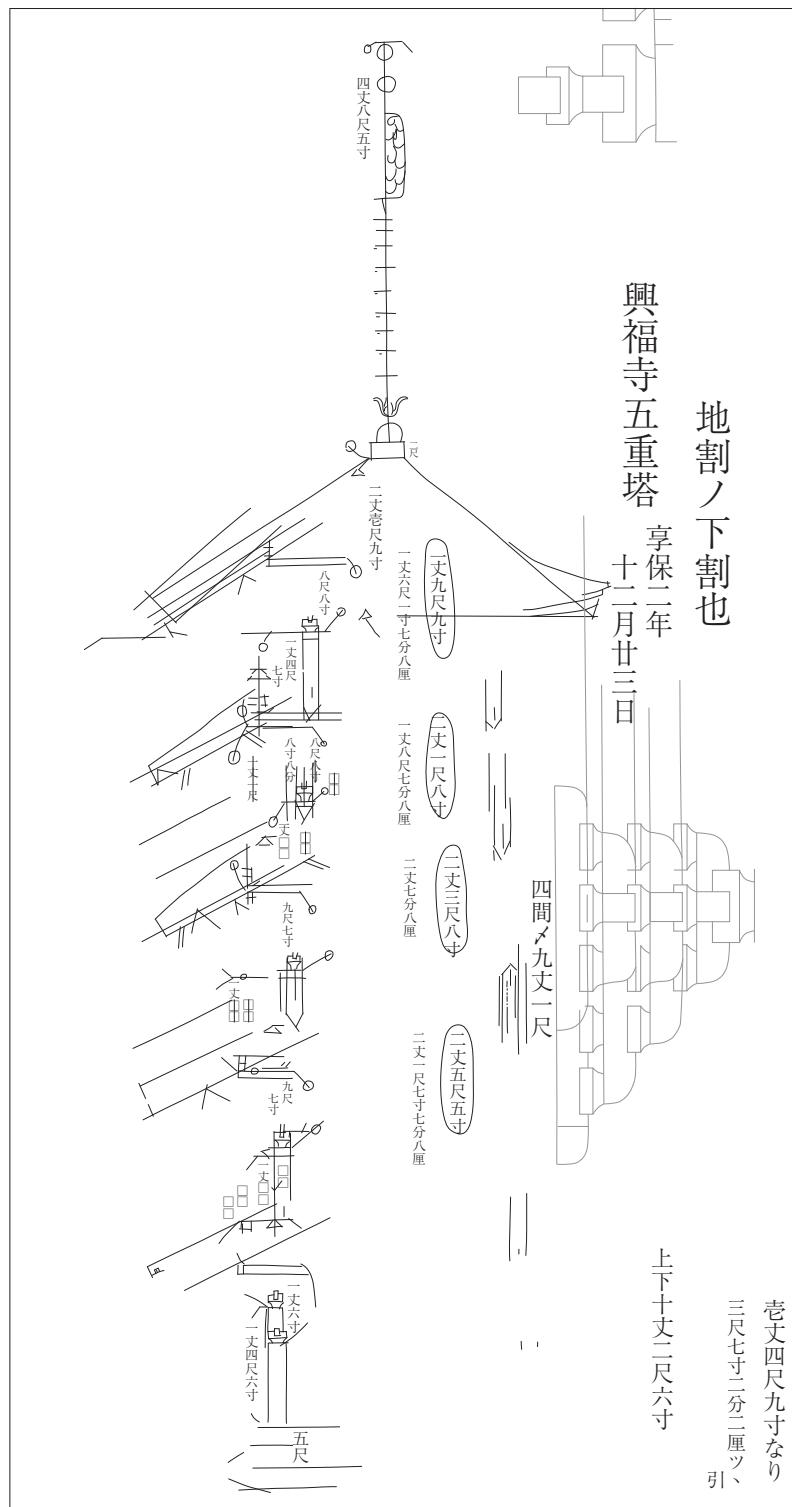


図4 資料② 略断面図（東京国立博物館所蔵 P-2437-20）書き起こし図（筆者作成）

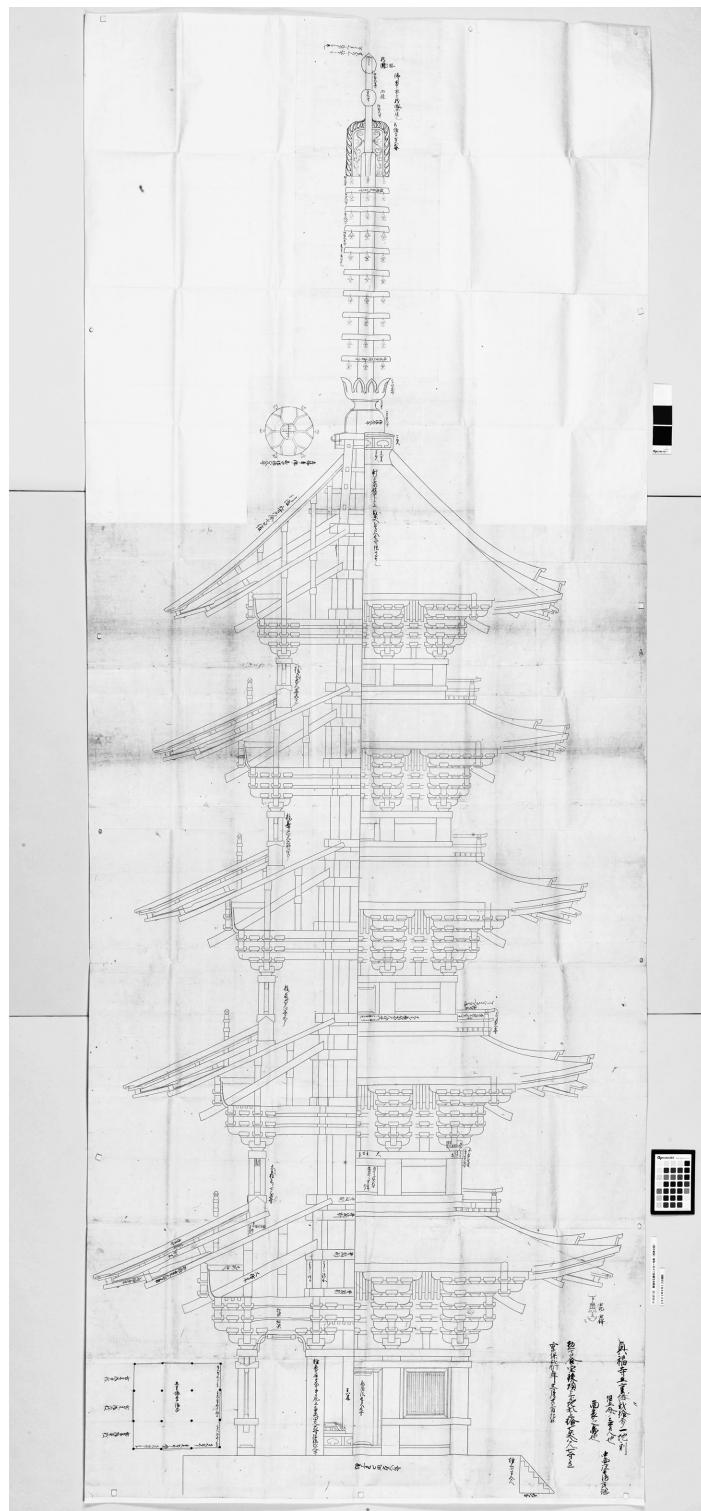


図5 資料③ 立断面図（東京国立博物館所蔵 P-2437-22、東京国立博物館提供）

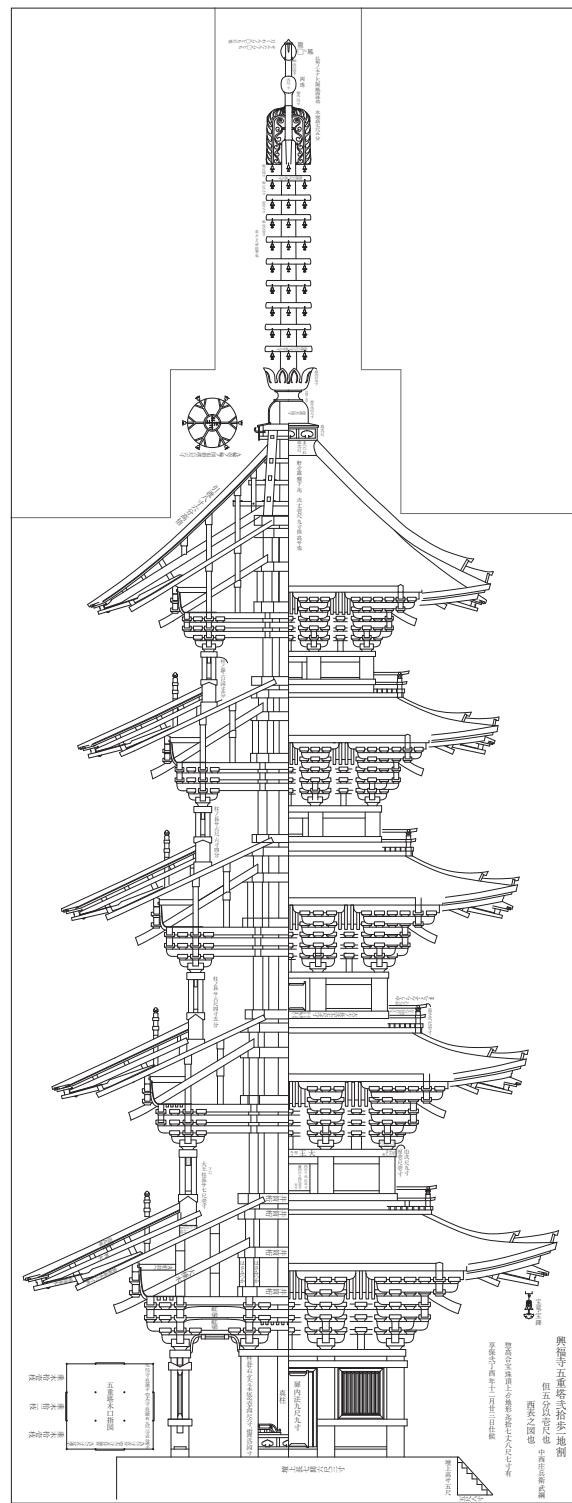


図6 資料③ 立断面図（東京国立博物館所蔵 P-2437-22）書き起こし図（筆者作成）

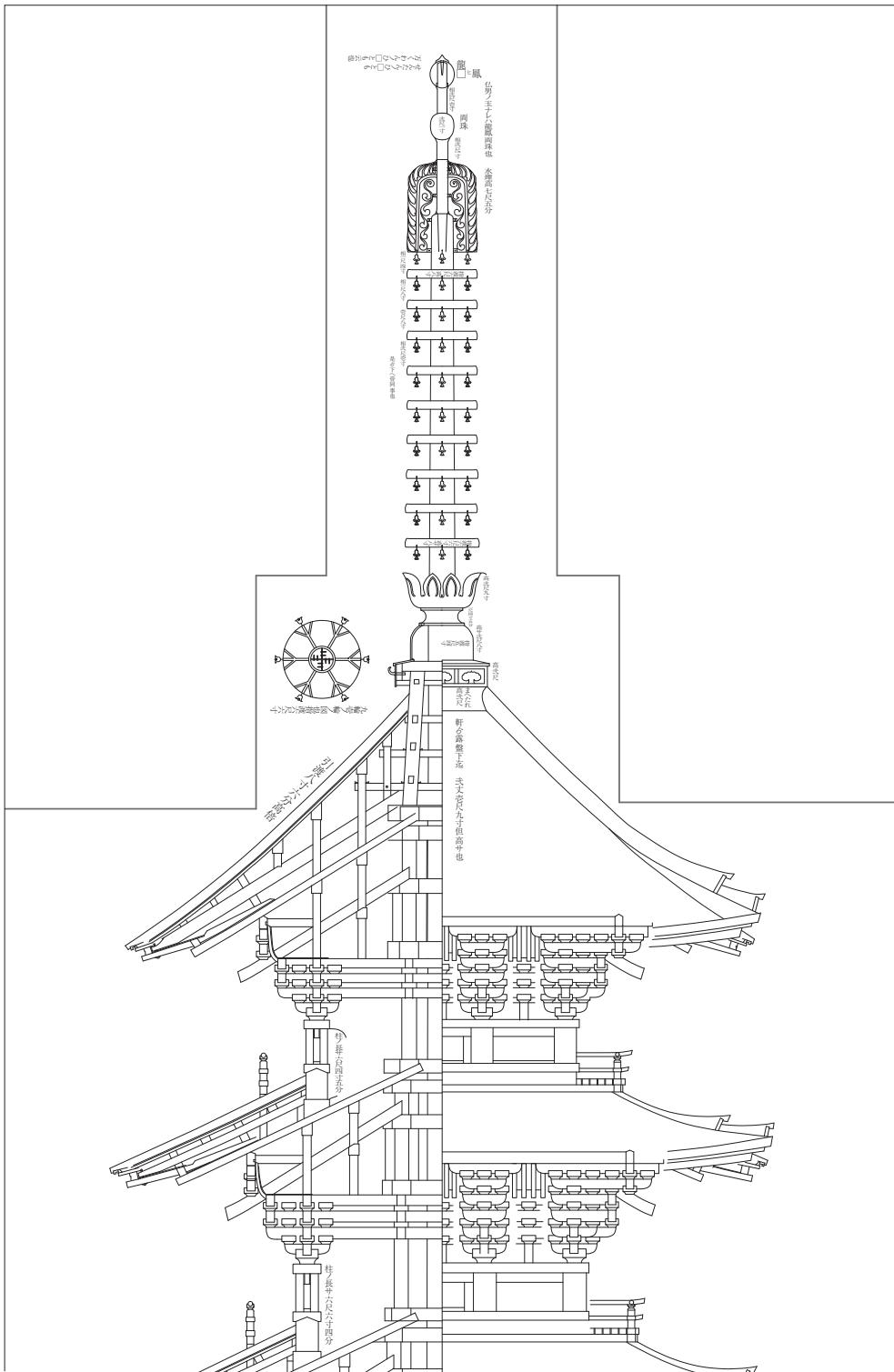


図7 資料③ 立断面図(東京国立博物館所蔵 P-2437-22)描き起こし図(筆者作成、上半拡大)

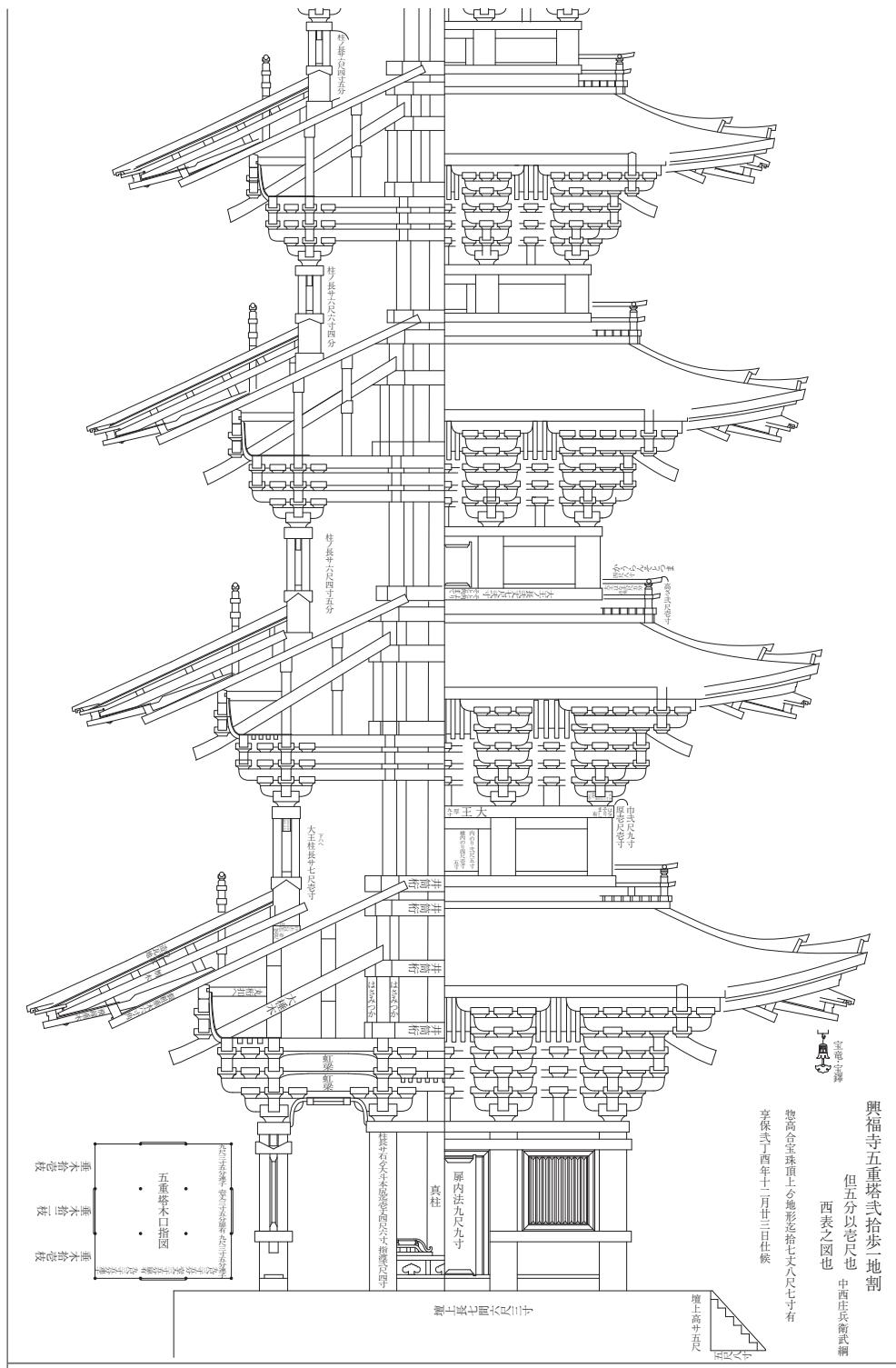


図8 資料③ 立断面図(東京国立博物館所蔵 P-2437-22)描き起こし図(筆者作成、下半拡大)

天端～宝珠天端が「四丈八尺五寸」、露盤高が「二尺」で、相輪高は50.5尺である。範囲は異なるが、「四丈八尺五寸」の寸法が両者に記載される。

- 13 資料②に記載される初重の柱高さと台輪成の和および五重軒先～露盤下端は、資料③に記載される寸法と対応する。
- 14 資料①～③で五重軒先～露盤下端の寸法が示されるように、層塔の造営として、各重の軒先（茅負）間などで計画したことも想定できる。ただし今回の場合、資料②に記載される寸法は、資料③での茅負間の図上計測値には整合しない。
- 15 なお、ほかの可能性としては勧進のためなどの再建計画図などが考えられる。
- 16 従来指摘がなかったと思われるが、資料③は奈良県所蔵「南都元興寺大塔式拾歩一図」に酷似する。これらの共通点や相違点などについては、稿を改めて論ずる予定である。

## 参考文献

- 海野聰 2020 「中世興福寺の伽藍復興にみる建築の〈復古〉思想」『建築におけるオリジナルの価値』 日本建築学会 pp. 9-22
- 大西修也 1976 「東大寺七重塔露盤考」『美術史』(26) 美術史学会 pp. 1-20
- 工藤圭章 1969 「五重塔」『奈良六大寺大観 第7巻 興福寺1』岩波書店 pp.28-33
- 国宝興福寺東金堂修理事務所編 1940 『国宝興福寺東金堂修理工事報告書』 国宝興福寺東金堂修理事務所
- 清水重敦 2000 「春日大工と近世の興福寺 新出の興福寺中金堂図面から」『奈良国立文化財研究所年報2000-I』 奈良国立文化財研究所 pp.26-27
- 清水重敦 2002 「春日座大工の持続と終焉」『文化財論叢III』 奈良文化財研究所 pp.567-583
- 奈良県教育委員会事務局奈良県文化財保存事務所編 1979 『国宝興福寺三重塔修理工事報告書』 奈良県教育委員会
- 奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所編 1996 『重要文化財興福寺南円堂修理工事報告書』 奈良県教育委員会
- 奈良文化財研究所編 2000 『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報II』 興福寺
- 浜島正士 1984 「興福寺五重塔」『日本建築史基礎資料集成11 塔婆1』 中央公論美術出版 pp.66-69
- 濱島正士 1989 「興福寺建築諸図」(東京国立博物館所蔵)について」『MUSEUM東京国立博物館美術誌』(461) 東京国立博物館 pp. 4-16
- 濱島正士 1992 「興福寺の各種設計図」『設計図が語る古建築の世界 もうひとつの「建築史」』 彰国社 pp.125-133
- 薮中五百樹 2005 「安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告VII』 帝塚山大学考古学研究所 pp.29-86

## 挿図出典

- 図1、3、5：東京国立博物館所蔵、東京国立博物館提供  
 図2、4、6～8：東京国立博物館所蔵資料に基づき筆者作成